

「つま子、愛してる！」

沙織莉が抱きついてくる。私はこういう時、どういふ顔をしていいのか分らない。だから抱きつかれた儘呆けた顔をする。

「つま子のその顔」

藍が私の表情を見て笑う。沙織莉は

「つま子はシャイだから赧れてるんだよねー。ねー」

と私を抱き締め左右に振る。背の低い私は思うが儘揺ぶられる。

「私は果汁百パーセントのジュースか」

私がいふと沙織莉がぴたりと止る。沙織莉は藍を見る。

「よく振って下さいってことね」

藍が注釈を加える。

「アツハハハハ左右いうことかアハハハハハハハ」

沙織莉がお腹を抱えて笑い転げる。私はすべった恥しさで夕焼けを見た。

蝉が相変わらず皐蠅い。外で話しているだけで、汗が頸筋を伝う。

公園のベンチは日中に灼かれた熱をまだ秘める。制服のスカートが燃え尽きないかと心配する。

三人で暫らく話して帰った。「つま子また明日」笑う沙織莉と藍に私は控えめに手を振った。

新井津甘という名前が嫌いだった。「つま」という音の所為で「ワイフ」「未亡人」「爪楊枝」「アライグマ」、漢字の所為で「甘酒」「甘味料」「スイーツ」「天津甘栗」などと小学生の頃から散々からかわれた。小学生の時好きだった隆君から「つま」と呼び捨て

にされた時は胸がときめいたが、私は可愛くない、いわゆる不好だ
ったから、そのときめきは其儘胸の中に隠しておいた。

隠しておいたら、腐るのか、夫とも、熟成して益濃く豊かにな
るのかと思っていたら、いつか消えていた。隆君とは中学校が別
だったし、夫に、彼は人気者だったから、小学五年生の時にはもう
彼女がいた。彼女は何回も変った。皆な可愛い子だった。何人変つ
ても、私の番が来ることはないだろうと、思った。

中学生の時は正太郎君のことが好きになった。私の身長は大して
伸びずに止り、胸も小さい儘で、責めて、同じクラスの歩美ちゃん
みたいにスタイルがよければ、私のよくない顔を補えるのと思
った。鏡を見るのが嫌いだった。買い物に行つて、エスカレーター
の脇に鏡があると、目を逸して見ないようにした。

正太郎君は到底も爽やかで優しい男の子だった。誰にでも親切で、
分け隔てなくその笑顔と優しさを振り撒いた。同じクラスの嫌な奴、
大内が、私と同じ委員会に入っている男子がいて、そいつがある日
私に言った。

「アライグマー」

「その呼び方やめてよ。何」

「今日の委員会お前一人でよろしく」

「ちよ、ちよっと待ってよ。なんでよ」

「なんでも何も、面倒いから」

「いや、私だって、面倒くさいし。勝手すぎでしょ」

「うるせえなーブスは黙って行きやいいんだよ」

言われた瞬間衝撃で喋舌れなくなった。自分でも、不好だって、分
っていた積りだったけど、他から言われると夫が覆りようのない
事実に変って仕舞った気がして、私の頭と胸が強く締め付けられた。

「は、はー？ 私、ブスじゃ、ないし……」

強気に返そうとしたが駄目だった。ポロポロと涙が零れた。胸が
何度も迫り上ってきて、喋舌れない。近くで聞いていたのか、正太
郎君が前に出て言ってくれた。

「お前女の子の子に言っていていいことと悪いこと考えろよ」
それを切懸きつかけに周囲の女子も加勢かせいしてくれた。
「そうよ大内。女子に何言ってるの」
「最っ低」
「自分だつて不細工のくせに」
大内は四圍まわりから厳しく非難されて逃げ出した。誰かが背中を擦さす
つてくれ、誰かがハンカチを貸してくれたが、涙を止めることが出
来なかった。私は正太郎君のことを益ます好きになつたが、此こんな
不好ぶずに好かれても嬉しくないんだらうなど、いつもより明然はつきり考えた。

二

「つま子、直そろそろ行こうよ」
休み時間、無心でペン回しをしていたら沙織さお莉りに呼ばれハツとす
る。ペン回しは私の唯一の特技だ。ペン回し職人という仕事があれ
ば弟子入りしたく思う。

「えっ次つて何だったっけ」
「化学だよ。実験室」
慌あわてて机の中に雑多に放り込まれた教科書類を雅練まさくる。

「早くー早くー休み時間が終おわるよー」
沙織さお莉りが私を急かす。私は必要最小限の動きで適確てきかくに必要なもの
を選び抜いてゆく。

「よしっ行こう！」
高らかな宣言と俱ともに荷物を引きずり出したら、其その反動で机が豪快
に倒れた。藍あが噴ふき出し沙織さお莉りが声を挙あげて笑う。

「今の、今のつま子の自信満々の顔」
沙織さお莉りはお腹なかを押おえて膝ひざを打うった。ヒイツヒイツと変な笑い声を
漏はらす。私は悪目立わるめだちした恥はずかしきで耳まで真まっ赤あかになった。

「何してんの、はい」
声と音がしたので振り向くと、陽樹はるき君くんが片手で軽々と机おこを起おこして

くれた。胸が強く脈打つと同時に見られた恥しきで「へアッ」と奇声を発する。

「もう、もうダメ」

沙織莉がうづくまってヒイッヒイッと笑い続ける。陽樹君も噴き出し顔を背けて肩を震わせる。藍が「あんたはウルトラマンか」と笑った。

「違うの、違うの、ありがとう新澤君」

失点を打ち消そうと急いでお礼を告げる。陽樹君は肩を震わせた儘「いい、いいんだ」と答えた。

実験室には四人で並んで向った。沙織莉は笑い上戸なので、私は失敗をするとすぐ笑って仲々収まらない。「へアッ」「へアッ」と腹を震わせつつ呻く。

「沙織莉笑い過ぎだよ。もういいだろ」

「だって、だってつま子が。あんな声出すから」

沙織莉と陽樹君は幼馴染なので、仲が好い。弾けるような笑顔と弾んだ声で話を交す。其遠慮の入れない距離を羨やましく思う。

「つま子」

藍がそっと囁いて私の肩を手で払う。何かと思って藍の顔を見上げると、「ごめんね、髪の毛ついてたから」と優しく笑う。

「あ、有難う」

背が高く綺麗な顔をした藍に憧られる。廊下に夏の強い日が差し、みんなの横顔を照らし、私の黒い髪を灼く。

公園のベンチに座ると、町が見渡せた。坂許りのこの町の中でも高台にあるこの公園は、夜になると広がる家々の灯りで景色が輝やくので、どこから湧くのかカップルどもがやってきて観光していく。だから夜になるまでが私の憩いの場となる。たまに夕方に来たカップルが「きれいだね」と言っていると「臍蠅え早く別れる」と思う。私に恋人がいたことはない。

中学生の頃から能くここへ来ていた。いいことがあった時も、嫌

なことがあった時も、このベンチに座った。ベンチのそばには大きな木が植えてあって、葉蔭で夏も直射日光は中らない。風もあるので涼しい。が気温そのものは如何ともし難くハンカチでおでこ頸筋の汗を拭く。

私は、虐められたことはなかったけど、能く挪揄かわれたり馬鹿にされたりした。勉強も然程出来ないし、運動音痴、歌や絵などの芸術にも長けておらず、何より性格が陰気だったので、仕方ないかと思う。誉められたり好かれたりする人間は必らず何かを持っている。私とは人間の種類が、生れた時から手にしているものが違う。

「つま子ちゃん」

呼ばれて素速く振向くと、陽樹君がいた。「は」咄嗟には声が出ない。「新澤君」體温が急激に上る。

「いやー今日も暑いね。帰る丈で汗だくだく」

陽樹君がワイシャツの胸元を押し引きして空気を入れながら私の隣りに腰を卸す。私は見え隠れする鎖骨と、細くて長い五本の指を盗み見る。

「ね、暑いね」

気の利いた応答が出来ず、彼の言葉をくり返した。

「今日のごめんね。沙織莉がいつまでも笑ってて」

言われて何の事かと思う。言葉が出ずに考えていると「あの、実験室に行く時さ」陽樹君が助け舟を出してくれる。

「あ、ああ、ああ、いいの、大丈夫。全然、そんなこと」

「本当に？ あいつ、一度ツボに嵌るとひどいからさ、もし嫌な思いさせてたら悪いなと思って」

「ううん、ううん、沙織莉ちゃん、馬鹿にして笑ってる訳じゃないの分ってるし、夫に、思い切り笑ってくれた方が気もち的にも助かるし」

「まあ、確かに、笑ってくれる人いなくて悲惨な空気になることあるよね。フオローしてくれてありがとうね」

陽樹君が私を見て笑う。私は何て気遣いのできる人なんだろうと

感激して胸がきゅっと締る。私は優しくされるのに弱い。思わず陽樹君から目を逸す。

陽樹君はしているアルバイトの話をしてくれたり、私の好きなテレビ番組の話を聞いてくれたりした。私は帰宅部でこれという趣味もないので、家にいるときは宿題をやるか漫画を読むかだかららとインターネットをやるか位のものだが、お笑いの番組が好きなので色々とチェックをして見ている。お笑いは陽樹君も好きらしく私は共通の話題があることに喜ぶ。

陽樹君のアルバイトの時間が近いたので途中まで並んで帰った。陽樹君に手を振って別れ、少し歩いて振り返り、陽樹君の背中が見えなくなるまで目で追った。

三

教室で一人ペン回しをしながら幸福感に浸っていた。最近、陽樹君が公園に来てくれるペースが分つて来た。アルバイトのシフト（私はシフトというものが何なのか今一分つていないが）の都合で水曜日に働らくことが多いらしく、その出勤時間までの間が暇なのだそうだ。

「あ、暇って言ったら感じ悪いね。ちょうどね、つま子ちゃんと話していると癒されて落着いた気もちでバイト行けるから、ちよつと寄らせてもらってます。でも、もし邪魔だったら控えるから言っつね」

「邪魔だなんて、そんな、全然」

一週間前に言われた「癒される」という言葉を思い出しニヤニヤする。ニヤニヤを隠すために口元を右手で隠す。左手のペンが非常な速度で回転する。

「なんかね、ダメだよね」

声が聞えて我に返ると教室には人がいなくなっていた。私だけが席に座っていて、クラスメイトの女子二人が入口の近くで向き合っ

て話している。

「調子にのってるの、分るよね」

「そうそう。お情けで同じグループに入れてもらってるのに、夫が分ってないっていうかね」

「外から見て明らかに浮いてるのが分らないもんかね」

「自分が特別だと思ってるんじゃない？ むしろ、自分が中心だと思っただりして」

「あり得るかもしれない所が怖いわ。鏡見てみるって」

「叫んできなよ。鏡持って『これ見てくださーい』って」

「ダッシュで」

二人は惴栗とするような大声で笑った。私は、何故だか、私のことだと、思った。自分が馬鹿にされているんだと。悪意が脳や耳や胸に刺さる気がした。調子にのっている訳じゃない。私だって、自分が不好だって、沙織莉や藍や陽樹君が優しいから仲好くしてくれていることだって、分ってる。鏡だって毎日見ている。毎日暗い気持ちになっっている。もし自分が可愛ければ。恵まれた容姿に生れていればと毎日思っている。調子にのっている訳じゃない。分っている。

言葉は頭や胸に次々湧いていたが、怖くて顔を上げられなかった。もし上げれば、嘲笑が其所に待っている気がして、臆病な私は立ち向かえなかった。或は私のことではないかもしれないなかった。単なる被害妄想かもしれないなかった。私は怒りよりも汚名を濯ぐことよりも只怖かった。私は顔を上げられずにいた。

廊下から、扉越しに話し声が聞えて、沙織莉と藍が教室に入ってきた。女子二人は既にいなくなっていた。沙織莉が不思議そうな顔をする。

「つま子、どうしたの？ 帰る」

「あ、ごめん、今日用事思い出したんだ。先に帰ってて」

蝉の声が響いて教室は暑かった。私は熱気から逃げるように鞆を手に取り、馳け出した。

公園のベンチにお尻を抛げ出すと汗が噴き出した。走ったことにより蓄わえられた熱を汗と息とで追い出そうとする。胸が苦しい。頭が疼痛々々する。

ハンカチで顔を覆い、おでこを膝に当てた。やはり蟬が臍蠅い。汗はあつという間にハンカチを濡らす。長い時間を掛けて、荒れた息を鎮めた。長い時間をかけて、よりそぼ濡れたハンカチは、私の指先をふやかした。

私は悪くない。私は分っている。口の中でくり返した。私みたいな不だが、沙織莉と藍みたいなの明るくて、みんなと仲の好い、可愛い、綺麗な子達と対等に付き合える訳ないこと位分っている。調子になんかのっていない。調子にのったことなんか一度もない。沙織莉が、あの時、修学旅行の班を決めるとき、いつものように一人排出れて先生からのお情けの声を待ち侘びていた私の、腕をとって自分の班に引き入れてくれた時から、笑って「あなた、私の班に入る。私達、ハッピー。あなたもハッピー。私はハッピー大使！」と言ってくれた時から、私の人生に華やかさや楽しみがほんの少し加わり始めたあの時から、沙織莉への感謝の気もちを忘れたことはない。「勝手に大使を名乗るな」と笑って沙織莉を諫めながら、「ごめんねこの子強引で。新井さん、嫌じゃなければ私達と一緒にの班になつてくれない？」と微笑みかけてくれた藍への敬愛の気もちを忘れたことはない。二人と、対等だなんて、一度も思ったことはない。私が認めない。だから、そんな、的外れな嘲笑をするな。虐められている訳じゃない。私よりずっと非どい目に遭っている人は世界中どこにでもいる。夫は分っている。分っているけど、私は、時々つらくて泣く。

蝉とともに十分ほど泣いたら気もちが収まってきた。一々大袈裟なんだよ。ハンカチで目元を拭いながら思う。他人から、自分の見た目の好くなさを指摘されると、いつも気もちが沈む。「可愛い」

というのは、自分以外の人間専用の評価なのだ、切に思い知る。自分の自分に対する評価はそこに影響しない。

だからと言って、本当に自分に向けられたものか分からない言葉にまで傷つけられるのは馬鹿げている。しつかりしろ、と顔を上げた瞬間声をかけられて心臓が跳び跳ねた。

「つま子ちゃん」

振り返ると自転車を引いた陽樹君が心配そうな顔でこちらを見ていた。私は恥しくて目を伏せ濡れたハンカチを掌らに隠そうとする。が私の小さな手には収まり切らずハンカチは糸かに顔を出した。

「ごめんねーいま大丈夫？」

いつもの穏やかな話し方で問われ、嫌とは言えなかった。只泣いてしまった後の崩れた顔を見られたくなかった。私は化粧もしていないし崩れる程の素地があるのかと言われれば夫は慥かにならないけど、夫でも崩れた顔が崩れたら益々悲酸だろうという論理で以て羞恥心が膨れ上った。左んな私に頓着なく陽樹君は自転車をとめ、私の隣りに腰を卸した。

「つま子ちゃん、聞いてよ、今日体育の授業で失敗しちゃったんだ。サッカーやってたんだけど、同点の儘試合が終了する直前でね、相手ゴール前で僕にボールが回ってきたんだ。僕は是はもうチャンスと思って渾身の力で右足を振り抜いた。でも力を入れすぎたのかボールはゴールを外れてバーに当っちゃったんだ。夫所かバーに当たった後凄い勢いで僕に返ってくるもんだから思いっ切りおでこに当たって吹き飛んじやったよ。ゴールは外すわみんなに笑われるわでもう恥しかったよ」

ニコニコしながら自分の失敗談を話す陽樹君を見て凄いなあと思う。私なんて失敗するのが当たり前だから最早笑ってももらえないし本気で怒られることもある。陽樹君が運動できることを私は知っているしみんなも知っているから同じ失敗でも温かく受け容れてもらえるんだろうと思った。

「私、私なんて運動音痴だからほんと非どくてね、小学校低学年

の時だけど鉄棒やったの。逆上がりの授業だけど私本当に何度やっても何歳になっても出来なくてみんな呆れた空気になってた。そこで偶たまま校長先生が通り掛かって『私が押して上げるからもう一度やってみなさい』って言うってくれたの。手伝ってもらった状態だったら出来たんだけど、折角せつかく押してくれるって言うからお言葉に甘えてお願いしたのね。ただそしたら校長先生が物凄ものすごいい勢いで押すの。私ビューンって回って必死に鉄棒にしがみついて何とか逆上がりできた。でも爪先つまさきに何かよく分わからない黒い物体が載のったのね。それ校長先生のカツラだった。私、先さききなんて比較にならない程空気が凍りつくの感じて逆上がりさえ一人でできていればって子供ながらに強く思ったよ」

私が話すと陽樹君がお腹なかを抱えて大声で笑った。

「それ、それ、その後どうしたの。体育の先生とかも見てたんでしょ」

「校長先生は光の速さで私の爪先つまさきからカツラを奪って校長室に戻っていったよ。誰かが『あれが校長先生の真の姿か』って言うってみんなが笑いそうになったけど、その瞬間体育の先生が鬼のような形ぎようそう相で怒鳴って誰も笑えなかった。今思うと私達が気付いてなかった丈だけで先生方は知ってたのかもね。勿論もちろん張本人の私は後でひたすら怒られて非ひどかったんだから」

「いやーさすがつま子ちゃんだね」

陽樹君が目元を拭ぬぐって笑ってくれる。私も釣つられて笑って、強張こわばってた胸の息が静かに出ていくのを感じる。やっぱり、陽樹君は凄はるいなあと思う。

「でも、大丈夫そうで安心したよ。なんか沙織莉さおが突然来て『ちよつと行ってこい』って言うから何事かと思った。大丈夫？ 何かあった？」

陽樹君の言葉に胸が詰つまる。沙織莉さおに対して感謝するとともに、恥部ちぶを見られたような恥はずかしさを感じる。私は又また少し目を伏せて、湿ったハンカチをぎゅつと握った。

「ううん、そんな、大げさな事じゃないの。ごめんね迷惑かけて。沙織莉ちゃん、藍ちゃんにも、嫌な思いさせちゃったね」

「迷惑じゃないよ！ 友達だったら、友達に何かあったら、心配するでしょう。話したくないことを無理に話すことはないけど、でも、人に話して楽になることもあるからね。あの二人だって、嫌な思いなんてしてないよ。大丈夫」

「迷惑じゃない」という言葉と「友達」という言葉に、胸がきゅつと締る。私は掌らのハンカチを弄ぶ。

「ありがとう。ごめんね。うん、…ごめんね」

私が言うと陽樹君は少し困った顔をした。その後、切替えてベンチから見える景色に目を移して言う。

「まあ、役割みたいなものもあるしね。愚痴とか、弱音でも、親だったり、兄弟だったり、友達だったり、好きな人だったり、この人に言いたいって思うことも、この人にはちよつと、って思うこともあるよね。僕は割とお喋りな方だからつい喋舌つちやうけど」

陽樹君が笑いかけてくれるのを見て

「好きな人」

思わず口に出す。

「新澤君も好きな人いるの」

陽樹君は一度止って、更に困ったように笑った。

「つま子ちゃんは？」

訊き返されて戸惑った。同時に何を訊いてるんだと遅れて顔が上気し出す。

「い、いるような、いないような」

「どんな状況？ どんな人？」

「や、優しい人です。凄く。状況？ 状況…」

「どうしたいとかあるの？」

「いや、私なんて、恐れ多いというか、譬えば付き合いたいか、左んな望みを持つてはいけないというか…今の、話したり、遠くから見たたり、できるだけで、幸せです。その人と私じゃ釣り合わない

のは分り切ってるんで、そんな」

「本当にいいの？」

「……」

「もつと仲好くなりたいたいか、一緒に過したいたいか、思わない？」

「それは……」

「もし其人が例えば結婚してるとか、まんがの中の人とか、左右いうことなら別だけだね、基本的には同じ人間だもん、釣り合うも、釣り合わないも、ないよ。其人が自分のことを認めてくれるかどうか、好きになつてくれるかどうかだよ。自分にどんなに自信がなくても、自分のことがどんなに嫌いでも、其人は、夫でも君のことを好きになつてくれるかもしれない。其答えを持っているのはつまりちゃんじゃない、相手の人だよ。だから、どんなに卑屈な思いを抱えていても、其相手に対してだけは、其儘の自分でぶつかっていかなきゃ其答えを得られないよ。」

「人に気もちを伝えられるっていうのは、素晴しい、素敵なことだよ。傷くことも、失うこともあるけど、夫でも自分の気もちを伝えなくちゃ、其人には一生君の気もちが届かないよ。君の気もちも、君の体を通さないと、どこにも行けないんだから。自分の気もちを大切に上げてよ。夫が『好き』っていう純粋な、誰かを思う気もちなら尚更だよ。もしかしたら、其人も、つまりちゃんの気もちを待っているかもしれないんだから」

聞いていて、恥しくなる。どうしてこんなに真っ直な気もちを、恥しげに、其儘、ぶつけてこられるんだろうと思う。太陽のようだ。だから、私は、灼かれて焦げる。

私の気もち。私の気もち。本当は、私だって、もつと欲しい。全部欲しい。もつと知りたいし全部知って欲しい。もつと仲好くなりたいたい。ずつと一緒に、くっついて眠りたい。手をつないで歩きたい。一緒に笑いたい。私だって全部欲しい。世間一般の人が持っているもの全部欲しい。

本当は其んなに、其所まで、馬鹿にされる程不細工と思っている

訳じゃない。何一つ得られないような不好だなんて思っている訳じゃない。町で写った窓ガラスで、お風呂上がりの鏡で、左様なに、悪くないんじゃないかと、本当は、少しだけ、可愛いと、可愛いんじゃないかと、思える瞬間だってある。赤の他人なんかには、馬鹿にされる程、不細工と思っている訳じゃない。

「好きです」

私の気もち。

「あなたのことが」

本当は欲しいのに抑え付けられた、私の気もち。

「ごめんなさい」

夫でも、初めて、伝えたいと思った。

「……え？」

そう思った私の気もちは、彼の顔を見て、今、干涸びた。

その顔。

ほら、私みたいな不好は望んじやいけなかった。

四

失敗した。失敗した。其後私の脳裡に充ち充ちたのは其一念だけだった。熱に浮されて、余計なことを言った。唆のかされた。恥をかかされた。

少し呆けた後、我に返った陽樹君は「え、あ」と言った。

「ぼくのことか？」

私は俯向いていた。糸かに頷突いた。あの一瞬の表情で、もう、答は、分っていた。

「あー」

陽樹君は声を長く伸して時間を稼いだ。

「ごめんね。つま子ちゃんのこととはとても好きだし、魅力的な子だと思っているけど、ぼくには好きな人がいるので、応えられませんが。ごめんなさい」

言って陽樹君は深く頭を下げた。私は其儘埋ればいいのにと思っ
た。

左右すれば私の恥は失くなる。

其後、途中まで並んで帰ったが、お互に一言も喋舌らなかつた。
別れの挨拶として私が頭を下げると、陽樹君は「じゃ、じゃあね」
と上擦った声で言った。いつも私が背中を見送る道 私は黙々と振
り返らず歩いた。陽樹君の叫ぶ声が聞えた。

「あの、ありがとう！ 嬉しかった」

私は振り返り、少し丈頭を下げた。

家に帰ると、唸り声を上げ髪を掻き乱しながらベッドに身を抛げ
た。失敗した。失敗した。どうして、あんな、勢いの儘言って仕舞
ったんだらう。浮れていた。浮かれた？ あんな言葉にのせられて、
振り落された。

何が「人に気もちを伝えられるのは素晴らしい」だ。左んなの、美
男美女の、其所までは行かなくても、人に嫌悪感を持たれないレベ
ルの人の、きれい事だ。ネットを見れば、「ブスに告白されても嬉
しくない、迷惑」なんて意見はどこにでも見つけられる。私だっ
て、同じクラスの関口君から告白されたら、そう思う。嬉しくも何
ともない。陽樹君の、あの顔を見ろ。「信じられない」というよう
な、「他に告白できる顔か」というような……

バタバタと暴れていたなら、「津甘、皐蠅い！」とお母さんに叱ら
れた。じつとしていたら、私、ふられたんだ……と徐々に実感が湧
いた。泣きたくなかった。初めて告白する時は、絶対に、成功したか
った。失敗したくなかった。傷つきたくなかった。だから、告白す
る前に、告白されたかった。好きな人から。陽樹君から。その可能
性を自分から失くした私は、本当に、馬鹿だと思う。

お母さんから晩ご飯の仕度が出来たと呼れたが、食欲がなく、喰
べたくないと断わった。しばらく部屋で茫としていた。気づいた
ら少し眠っていた。目元が濡れていた。起きると、お腹が空いてい

て、残っていたご飯を喰べた。こんな時でもお腹は減るんだと思うと悲しくなった。生姜焼きが旨しくてご飯を少しお替りした。

翌日、私は沙織莉と藍を極力避けた。移動教室の時は、用事があるふりをして先に行ってもらい、休み時間になったらすぐ立ち上つて宛もなく構内を狼付いた。沙織莉と藍が仲好くしてくれるより前はずっと一人だった。でも、其時は、ただ机に突つ伏して休み時間が終わるのを待てば良かった。此んな、面倒なことを、仕なくてよかつたのになあと、出入が禁止されている屋上の前の階段に座って、近くを通る足音に怯えながら思った。

陽樹君の方も見ない様にして過した。沙織莉がこちらを見ている様に思い、校内を歩きながら、いつ迄こんなことをしなくちやいけないんだらうと退屈に思った。歩く所なんて多くない。行きたい所もしたいこともない。沙織莉と藍からの「何かあった？」というメールにも、「体調が悪くて」で返した。私はいなきやいけない人間じゃないんだからこんな態度を続けていれば二人ともすぐに忘れてくれるだらう。夫迄の辛抱だと思う。

思っていたが、三日目に同じように校内を歩いていると、忽然腕を掴まれ物蔭に引込まれた。沙織莉だった。

「つま子」

聞いた事のない低い静かな声で語りかけられる。

「は、はい」

「何か言うことあんじやないの」

私は萎縮して思わず頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「何に」

沙織莉が表情を動かさずに言う。

「夫は何に詫まってるの」

「わ、わかりません」

「あんたはこどもか！」

大声を上げられ私は惴栗とする。身體が強張る。そばに居て様子を見ていた藍が沙織莉を諫める。

「沙織莉、大声出さないの。つま子、最近、様子がおかしいから沙織莉と心配してたの。何かあったんでしょ？ それを、話せとは言わないけど、突然避けられるのは私達も淋しいよ」

「話せ！」

「沙織莉。単に気もちの整理がつかない丈なら、そう言ってくれば私達も待つよ。もし私達が何かしたなら、ちゃんと詫まらせて。何が原因でも、どんな内容でもいいから、一度話をさせてくれたら嬉しい」

藍に静かに話しかけられると、胸に迫った。二人のことを直視できな。儘喋舌った。

「沙織莉ちゃんと、藍ちゃんに、何かされた訳じゃないよ。そんな訳ない。単に、私が、今迄勘違いしてた丈だから、夫に気付いて、直そうとして、もともと一人慣れてるし、二人に、仲好くしてもらってるのが、おかしいって、だから、夫で」

自分でも何を言っているのか分らなかつたが、他に言葉が出なかつた。沙織莉は案の定「全然分らん」と叫んだ。

「それ、誰かに言われたの。誰が言ったの」

「誰かに、言われた訳じゃないよ」

「そいつら殺す！」

「沙織莉。つま子、私達と仲好くするのはおかしいって、自分で、何となく思って、それで私達を避けたってことなの？」

藍が纏めてくれたので私は頷突いた。沙織莉が大きな長い溜め息をつく。

「陽樹のことじゃないの」

私は床のタイルを見ながら固まった。あの日の彼の顔が不意に蘇える。

「何か、聞いたの」

「何も聞かないよ。あいつはこういう時馬鹿みたいに何も喋舌ら

ないからね。でも馬鹿だから態度に出まくって端から見てたらずぐに分るんだよ。そうしたら、つま子も、おかしいでしょう。何かあったんだろ？なあとはい思うよ」

私はどうにかして胡麻化す方法はないかと模索した。恥を隠したい、これ以上傷つきたくない、私と、陽樹君が釣り合わないなんて、誰が見ても分る。分を弁まえない不都合だなんて、誰にも思われたくない。私を責めるのは私だけで十分だ。

「私は」

「一つ、詫まらなくちゃいけないことがあるの。あの日、つま子の様子が可怪しいからって公園に陽樹を向わせたのは、私。つま子、あいつに好意持ってたでしょう、夫がどこまで強い気もちかは分らない、友達としては好き位の気もちでもいい、デリカシーないのは分ってる、でも言わせて。私はつま子が陽樹に好意を持ってると思ひ込んでた、陽樹も、多分、話が合って面白って言うってたしつま子のこと悪くは思っていないと思ってた、だから、短絡的だけど、二人が仲好くなってくれればと思ってた、いつか、二人が付き合ってるのが見たいなど、思ってた。あいつ馬鹿だよ。あいつの好きな人、あいつ、馬鹿なんだよ。だから他に、身近な誰かに目を向けさせたかった」

「好きな人って、沙織莉ちゃんのことじゃ」

「私じゃないよ。私に彼氏がいるのあいつも知ってるし、どちらにしろ其んなことは全たく関係なく、私じゃない」

話を聞いて混乱した。自分の好意を見抜かれていたのがたまらなく恥しかった。床を見つめる視界に怒気が籠る。恥しさが、行き場を失くして、暴れた。

「か、勝手だよ。別に、好きなんかじゃないのに、そんなお節介されたら、迷惑。迷惑だよ。私みたいな不都合に好かれたら、陽樹君だって、迷惑」

「迷惑ってあいつが言ったの」

「い、言われてないけど分るでしょ、私みたいなのに好かれたっ

て、迷惑だって」

「私みたいなものって何？ 誰かを好いたら迷惑になるような人ってどんな人？」

「不細工な人だよ！ 私みたいな不_ぶ好_すが、全然、誰からも好_すかれない不_ぶ好_すから、好_すかれても嬉_{うれ}しくないでしょ。根_ね暗_{くら}で不_ぶ好_すでいい所_{ところ}なんて一つもないのにそんな人間が誰かを好_すくなんてキモいでしょ。何を期待してんだって、叶_{かな}う訳_{わけ}ないだろって、思_{おも}うでしょ。うぬぼれんなって、思_{おも}うでしょ！」

「私は思_{おも}わない」

「私は思_{おも}うの！ 私は暗_くくて歪_{ゆが}んでて性格最_き悪_{あく}だから身_みの程_{ほど}弁_わまえない不_ぶ細_こ工_{こう}がク_クラスの誰かを好_すきって言ったら『うわあ』って思_{おも}うの。好_すかれた人かわいそうって思_{おも}うの。だから、自分_{自分}が、そう思_{おも}われても仕方ないって、思_{おも}うの」

怒_いりは涙_{なみだ}になり悲_{かな}しみになりとまらない言葉_{言葉}になった。吐_つき出_ですと四_あ困_{たり}はしんと静_{しず}かになった。

「自分のこと、不_ぶ好_すだって、思_{おも}うの」

「思_{おも}う」

「つま子。私のこと嫌_{きら}いになっていいからこれだけ聞_きいて。まず眉_{まゆげ}毛_げ整_{ととの}えよう。顔_{かほ}も毎_{まい}回_{かい}今_{いま}以上_{いじやう}に丁_{ちやう}寧_{ねい}に洗_{せん}って自分_{自分}に合_あう洗_{せん}顔_{がん}料_{りやう}探_{たん}してお風_{ふう}呂_{りよ}上_{じやう}がりには化_け粧_{じやう}水_{すい}塗_ぬって乳_{にゅう}液_{えき}塗_ぬって手_て入_いれをしよう。抵_{たい}抗_{かう}あるかもしれないけど雑_{ざつ}誌_し読_よんで自分_{自分}に合_あう服_{ふく}や髪_{かみ}型_{がた}探_{たん}して一つづつ試_ししてみよう。いい美容_{びやう}院_{いん}も探_{たん}そう。高_{たか}くなくていいからできる範_{はん}围_いで今_{いま}の自分_{自分}にできること一つづつしよう。私_{わたし}も藍_{あい}も手_て伝_{でん}うよ。本_{ほん}当_{たう}に興_{きやう}味_みない人もいるから今_{いま}まで言_いわなかつたけど、自分_{自分}が不_ぶ好_すだと思_{おも}うなら、それを嫌_{きら}だと思_{おも}っているなら、できることはまだ沢_{たく}山_{さん}ある筈_{はず}だよ。それ全部_{ぜんぶ}やっってから不_ぶ好_すだっていおう。メイ_{メイ}ク_クの練_{れん}習_{じゆ}もしよう。女_{おんな}はメイ_{メイ}クだよ」

「でも、私_{わたし}は、二人_{ふたり}とは元_{もと}々_々持_もつてるものが違_{ちが}う」

「元_{もと}は違_{ちが}うよ。元_{もと}はみんな違_{ちが}う。夫_{それ}でも、今_{いま}持_もつてるものでできることするしかないじゃない、誰_{たれ}だって。あの人_{ひと}みたいになりたい

と願えば鼻が高くなる訳でも目がパッチリする訳でもない。自分が嫌だと思っただけ肌は綺麗になる訳でも痩せる訳でもない。今できることをするしかないんだよ。夫でもダメなときに諦めよう、全部放り投げよう、泣くのも笑い飛ばすのも私達が付き合うよ。だから、私達がダメなときにも、付き合ってください。夫が友達でしょう」

私は言葉に詰った。恥しきは、暴れていたけど、言葉になって出て行こうとはしなかった。沙織莉はふっと力が抜けたように笑った。

「何より元が違うのはこの人ですよ。私がひたすら手入れしてメイクして胡麻かしているのに大した努力もせずこの顔、肌、髪の毛の艶ですよ」

沙織莉から指を指された藍は髪を一束つまみ、それを見てから照れ臭そうに笑った。

「そうかな。ありがとう」

その仕草に私は見とれた。空気が緩むと、私の胸に詰っていた固い物が少しずつ解れた。ほぐれて肺が広がり、空いた隙間に涙が溢ちた。

「ごめん、ごめんね」

今度は静かに泣いた。泣きやみたいけどとまらなかった。何かを、説明したいように思ったけど、言葉が出て来なかった。藍がゆつくりと背なかをさするので、私の背なかは温まり、固い物は益々零れて落ちた。

沙織莉が静かに言った。

「大丈夫だよ。言える時で大丈夫。落ちついて、整理ができれば、いつでも言ってる。いつでも聞くから」

私は涙を拭いながら頷いた。藍が差し出してくれたティッシュで涙をかむ。遠くで生徒の人数がした。もう昼休みが終るのか、と気付くと沙織莉が又大声を出した。

「あと一つ！ 君に言いたいことがある」

私は驚ろきおののき怖々答えた。

「な、なんでしょうか」

「私はね、名前の呼び方なんてどうでもいいと思ってる。どうでもいいと思ってるけど、どうでもよくないこともある！ つま子の『沙織莉ちゃん』『藍ちゃん』これはね、距離がある、遠慮を感じる。あんたは私の友達だよ。少なくとも私は左右思ってる。誰が決めたことでもなくて私がそう思ってるの。だから、つま子も私のこと、私達のこと友達と想ってくれるなら、そんな他人行儀な『ちゃん』はやめて。失礼でもなんでもないから呼び捨てにして」

私は言われて戸惑った。遠慮から『ちゃん』を付けている、訳ではないつもりだった。何より改めて呼び捨てにするのは恥しかつた。助けを求めて藍を見ると、藍はいつもの優しい表情で、ゆっくりと頷突いた。

「藍」

流然と名前が出てきた。それから沙織莉を見た。

「沙織莉」

藍が嬉しそうに笑い、沙織莉が厳そかに頷突いた。その後沙織莉が言った。

「なんかキモい」

「こらー！」

失礼なことを言われたので怒って追いかけると沙織莉は大声で笑いながら逃げた。藍はその場で声を殺して笑っている。私はもう一度目許を拭いながら、沙織莉の背なかを指して走った。

〈未完〉